2026年度　入学試験問題

国　語

（第１回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお本文には省略した部分があります。

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×１０７行の文章」

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×107行の文章」

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×１０７行の文章」

問1　次の文章はもともと文中にあった段落です。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分として最もふさわしい場所を文中の［1］～［4］から一つ選び、番号で答えなさい。

進歩は無欠の善なるものであり、進歩こそ人間を幸福にする呪文（じゅもん）であると信じられてきた。その呪文にしたがって、文明の進歩はすさまじいほどに加速度を増して、まっしぐらに走り出しはじめている。その進歩の加速度を測定する方法もないし、文明の利器が人類を乗せてどこへ向かって走っているのか、だれも予測できない。

問2　――線①「人間は幸福を求める動物である」とありますが、「人間の考える幸福」について説明した次の文の空らん［A］～［C］にあてはまることばを文中からぬき出し、それぞれ指定の字数で答えなさい。

人間以外の動物は、あくまで［A］（三字）の一部として自身が現在生息している範囲（はんい）の中で［B］（二字）さを求める。それに対して人間は［B］な環境を自らの手で作りだそうとし、幸福の基準を、［C］（三字）な豊かさを追求することだと考えるということ。

問3　――線②「農業と牧畜の発明」とありますが、これは何をもたらしましたか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　永久に安定した食料を得るために自然を守るための工夫（くふう）を追求し始めたこと。
2　自然環境を変化させてでも自分たち人間の幸福を追求するようになったこと。
3　人間が狩（か）りをやめたことで絶滅（ぜつめつ）する動物の数が減り生態系が豊かになったこと。
4　安定した食料のおかげで人間同士の争いが減り人口が増え文明が発達したこと。

問4　空らん［X］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　葛藤（かっとう）　2　不調　3　困難　4　錯覚（さっかく）　5　混乱

問5　――線③「目を見張らされる」とありますが、「目を見張る」のことばの意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　喜ぶ　　2　驚く（おどろく）　　3　あきれる　　4　警戒（けいかい）する

問6　筆者は文中で「文明の進歩」を「乗り物」にたとえています。このたとえは何を表したものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　人類の欲望にブレーキがかからないと人口の増加が止められなくなってしまうということ。

2　生命の安全性を完全に確保した人類は文明を完全にコントロールしていると言えるということ。

3　文明の発展の行き着く先には人類が制御（せいぎょ）できないような事態が起きる可能性があるということ。

4　技術が発展することで人間はより良い生活ができるのでますます文明を発展させるべきだということ。

問7　――線④「第一の過ち」とありますが、この内容を説明した次の文の空らん［A］～［C］にあてはまることばを文中からぬき出し、それぞれ指定の字数で答えなさい。

本来、ヒトという生物種が自然に［A］（二字）するためには長い時間をかけていく必要があるのだが、近年、人類は自らの幸福を追求するために［B］（二字）に高度な文明世界を作ってしまった。そのように突然（とつぜん）現れた環境に完ぺきに［A］できるはずはない。また、文明の名のもとに起きた環境破壊も相まって人類は自らの手で［C］（二字）の危機を作り出してしまっている。

問8　――線⑤「生物は二つのいのちを持っている」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　生物は主に成長・生殖（せいしょく）などによって維持される種のいのちと、世代交代を通じて永続する個のいのちを持つということ。

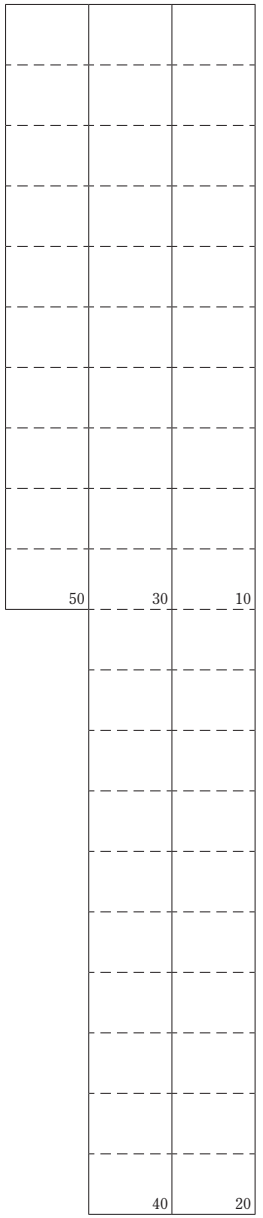
2　生物は永遠に生き続けることは不可能な種のいのちと、子孫を残すことで永遠に生き残る個としてのいのちを持っているということ。

3　生物は種として死を迎えることがあってもその個体としての生存条件さえ変わっていなければ個としても生きているといえること。

4　生物は一つの個体としてはいつかは終わりを迎えるにもかかわらず、生物種としては生き続けることができるということ。

問9　――線⑥「どう対処すればよいのか」とありますが、筆者は、人間の存在を考え直し、それにもとづいて今後の生活の設計をするべきだと言っています。そのうえで、人間は環境にどのように対処するべきだと言っていますか。五十字以内で答えなさい。

〔下書き用〕



問10　次のA～Eはこの文章を読んだ生徒たちの発言です。この中から、本文の内容として**ふさわしくない**ものを一つ選び、記号で答えなさい。

A　文章前半に「自然を征服し管理する方向に向かった」とあるよね。私たちは普段（ふだん）の生活に困っているという実感はないけど、言われてみると人間が今の豊かな暮らしを手に入れるために地球環境は破壊されてきたんだと実感するね。

B　他のどんな生物も与（あた）えられた環境の中で生きているのに、人間だけが「自分を自然に合わせる」のではなく、「自然を自分たちに合わせる」方向に進んでしまったんだね。

C　人間は動物界の中でもかなり高い知能を持っている種だということは間違（まちが）いないけど、その人間の知能をもってしても環境破壊の原因というものはいまだに見つけられないし、解決策も見つからないんだね。

D　文明の発展によって、私たちは幸せになっていると思っていたけど、実はその文明の発展によって人類という種が暗い未来に向かっていただなんて思ってもみなかったよ。

E　熱帯雨林の砂漠（さばく）化や、酸性雨の問題もニュースでよく見るけどどこか他人事だと思っていたのかもしれないね。一人ひとりが意識を変えることで変化が生まれるかもしれないね。

2　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一葉の写真がある。

麻布の店を売り払って引っ越した郊外の家の居間に、それは祖父母と伯父の遺影に並んで、檜の鴨居を飾っている。

「伊能夢影」の刻印が額に捺してあるが、それが被写体である老人の名か、あるいはカメラマンの名であるのかはわからない。

A　「初代・伊能夢影」を「二代目・伊能夢影」が撮ったのだから、どちらでもいいということになるのだが。

そのモノクロ写真は、父が「写真家」と呼ばれるようになったいわばデビュー作で、祖父が亡くなる前年にコンテストの第一席に選ばれた「老師」と題する一枚だった。

祖父は父に厳しかった。二代目を継ぐべき一人息子が戦死し、腕のよい弟子たちもみな兵隊にとられたり商売替えをしたりして、結局戦後に一人だけ居残っていた父を、娘に添わせたのだった。そんな事情がある上に二人の性格が性格だから、祖父はいつも父をいじめているように見え、父は祖父を避けて気ままな風景写真を撮り歩いているのだと、誰もが思っていた。

名人だが※因業な義父と、無能で自分勝手な婿――グランプリに輝いた「老師」の一枚は、そんな①世評をいっぺんに吹き飛ばす傑作だった。しかもタイトルが「老父」ではなく「老師」であったことは、常にレンズを通して対峙し続けた二人の関係をB　語っていた。そして父は、コンテストの応募に際して堂々と、「伊能夢影」を名乗った。よほど自信があったのだろう。

青山の絵画館を背にして、祖父が銀杏の実を拾っている。一面に散り敷く朽葉の上に膝をつき、ステッキを投げ出し、旧式のライカを腰に回して、まるで何かをア探しあぐねるように、祖父は背を丸めてはいつくばっている。冬の弱日が魔物のように影を曳いている。

②真実の木の実を懸命に探し続ける老いた芸術家と、その姿を見究めようとする弟子のまなざしが、二人のことなど何も知らぬ鑑賞者にもはっきりと感じとれる。

「老師」は名タイトルだった。

ところで、父がその写真をいつの間に撮ったのか僕は知らないのだが、関りのある記憶がひとつだけある。ちょうど同じ季節の同じ時刻に、祖父と同じ場所を歩いたことがあるのだ。

おそらく祖父を病院に連れて行った帰りがけか何かで、たまたま絵画館前を通りすがったか、銀杏が見ごろだから回り道をして行こうということになったのだろう。ともかく僕と祖父は並木道に車を止めて、ぶらぶらと絵画館をめざして歩いた。

みごとに色付いた並木道の果てに、夕日を受けた絵画館のドームが絵葉書のように収まっていた。

ふいに祖父が立ち止まった。

「おめえ、大学なんざ無理に行かなくたっていいぞ」

え、と僕は祖父の表情を窺った。進学をしたくないなどと言ったためしはなく、それほど学問をおろそかにしていたわけでもなかった。

「写真屋の倅が大学なんぞ行って、どうするんだ」

祖父の様子は尋常ではなかった。黄色い落葉を踏んで歩くうちに、③祖父は三十年の時間を踏み越えてしまったのだ。ステッキの先で地面を叩きながら、祖父は吐き棄てるように「ばかやろう、ばかやろう」と呟いた。

僕は祖父の小さな肩を揺すった。

「しっかりしろよ。俺だよ、俺。真一さんじゃねえよ」

祖父の魂はじきに戻ってきた。

「ああ……おめえか。何だかよ、歩ってるうちに、頭ん中が真黄色になっちまった。毒だな、ここいらは」

それから祖父は、かたわらのベンチに腰を下ろして、僕の初めて耳にする話をした。

じいちゃん、一生に一ぺんだけ、ライカのシャッターが切れなかったことがある。

プリントがねえのは、雨のせいにしたけど、このライカはちょっとやそっとの雨なんかでまいっちまうようなヤワじゃねえ。あんときはじいちゃんがまいっちまったんだ。

写真屋がふるえちまってシャッターが切れねえって、ハハ、情けねえ話もあったもんだな。

銀杏の葉っぱはまだちょいと色付いたくれえで、気の早えのがちらちらと落ち始めていたっけ。それでも忙しい時代のこったから、地べたはその気の早え葉っぱだけで真黄色になってた。

ばばあと二人して真一を送ったんだ。ほれ、そこの広場に※東條さんがきて、※学徒の出陣式をやったのさ。おふくろは女学校ごと工場に行ってたし、おやじはあのころは※一聯隊だ。

じいちゃんな、真一のことが大好きだった。おめえと同じぐれえ、大好きだった。

だからずっと、④どうしてこんなことになっちまったんだろうって考えながら歩ってきた。

大学に行くときは止めたんだ。写真屋の倅が大学なんぞ行ってどうするって。だが、あいつはデキがよかったし、末は博士か大臣かてえんなら、写真屋なんてじいちゃんの代でよしてもいいと思った。

おめえのおやじや他の若い衆みてえに、赤紙もらって兵隊にとられるならまだしもあきらめはつく。したっけ、どうして一生けんめいに学問してる大学生まで、鉄砲かつがして戦に出さにゃならねえの。ましてや真一は泳ぐこともろくにできねえイうらなりで、どうして海軍士官になって生きて帰れるの。

大学になんざ行かすんじゃなかったって、じいちゃんC後悔した。

ばばあはじいちゃんのケツを叩いて、しゃんとしない、みっともないったらありゃしない、って言ってたが、じいちゃんはそれどころじゃあなかった。

真一が死んじまう。真一が死んじまうって、そればっか考えてた。

真一の真は、写真の真だ。

あいつはじいちゃんにとって、たった一枚の、納得のいく写真だった。

そんな真一のあの日の姿を、いってえどうやって撮れっていうんだ。

じいちゃんは日本一のカメラマンで、このライカは世界一のカメラだ。けど、じいちゃんもライカも、あの日の真一だけはどうしたって撮れなかった。構えても指が動かなかった。指が動いても、シャッターが落ちなかった。

だから、雨のせいにしたんだ。

ぶつぶつと ウ 独りごちながら、祖父は泣いてしまった。

僕は慰めの文句が思いつかずに、祖父の肩を抱き寄せた。そして、ようやく言った。

「おじいちゃんは日本一のカメラマンで、ライカは世界一のカメラだから、だから写真が撮れなかったのさ。きっとそうだよ」

「⑤うめえことを言いやがる。口の達者なところだけは、ばばあに似やがって」

D 唸るように泣いてから、祖父は切実な声を絞った。

「おめえに頼みがある。慶応だけは行ってくれるな。じいちゃん、おめえが※フライパンをかぶった姿なんぞ、見たくもねえ。祝いの写真だって、撮ってやれねえからよ」

もちろん僕が慶応に合格する保証はなく、万がいち行ったところで学生帽などかぶるはずはなかった。だが僕は大好きな祖父のために、「わかったよ」と言った。

それから祖父は——

落葉の黄金色に散り敷く舗道に膝をついて、銀杏を拾い始めた。

まるで埋もれてしまった一葉の写真を探すように。どこかに消えてしまった生涯にただ一枚の、納得のいく肖像画を探すように。ステッキを投げ出し、ライカを腰に回し、腹這いながらうろたえながら、いつまでも落葉を掻き続けた。

もしかしたら僕は、父の撮った写真と僕自身の記憶とを混同しているのかもしれない。しかしまちがいなく言えるのは、あの輝かしい名作を撮影した瞬間の父は、そのときの僕とそっくり同じ気持ちでいたということだ。

父の※ペンタックスには、ほんのりと薄い色の「嫉妬」というフィルターがかかっていたかもしれない。そして⑥溢れ出る感情を噛みつぶしてペンタックスのシャッターを切ったとき、父は「伊能夢影」になった。

祖父が学徒出陣の壮行会に臨む伯父の写真を撮ることができなかったのは、人間の情ではなかったと思う。

おそらく祖父は、日本中のすべてが美徳と信じたその姿を、撮るに耐えない醜い形だと見究めたのだろう。

祖父自身さえ人情だと錯誤したそのためらいは、実はカメラマンの冷静な目がそう判断した結

果だった。だから心の悲しみとは別の力が、シャッターを押す指を制してしまった。ライカは反応しなかった。

祖父は名人だった。

（浅田　次郎「卒業写真」より）

※因業……がんこで思いやりがないこと。
※東條さん……東條英機。当時の首相。
※学徒の出陣式……学生を戦地に送り出す壮行会。一九四三年十月二十一日に神宮外苑で行われた。
※一聯隊……旧陸軍の歩兵第一聯隊。聯隊は軍隊の編成単位。
※フライパン……慶應義塾大学の学生帽をたとえたもの。
※ペンタックス……カメラのブランドの一つ。

問1　文中に登場する「真一」は「僕」にとってどのような関係にあたりますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　祖父　　2　父　　3　伯父　　4　師匠

問2　空らん［A］～［D］に入ることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　おのずと　　2　つくづく　　3　ひとしきり　　4　もっとも　　5　やおら

問3　――線ア～ウのことばの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア　探しあぐねる

1　思うように探すことができない
2　探しあてようとして必死になる
3　あてもなくあちこち探しまわる
4　探すのをあきらめざるをえない

イ　うらなり

1　頭がすぐれている様子
2　社会の事にうとい様子
3　まじめでいちずな様子
4　いかにも弱々しい様子

ウ　独りごちながら

1　からだを丸めながら
2　しゃがみこみながら
3　何かつぶやきながら
4　大声でむせびながら

問4　――線①「世評をいっぺんに吹き飛ばす傑作だった」とありますが、この作品によって世間の人が気づいたことは何ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　父が風景写真ばかり撮っていたわけではなく、祖父も父に愛情を持っていたこと。
2　父が無能なカメラマンというわけではなく、祖父との関係も悪くはなかったこと。
3　祖父がいつも因業だったわけではなく、父も常に気ままだったわけではないこと。
4　祖父が父をいじめていたわけではなく、父を名人に育てる能力も持っていたこと。

問5　――線②「真実の木の実」とありますが、別の場面でこれをどのように表現していますか。文中から二十八字で探し、最初の五字をぬき出しなさい。

問6　――線③「祖父は三十年の時間を踏み越えてしまった」とありますが、ここでの祖父の様子の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　青山の絵画館を目指して歩いていくと、ちょうど銀杏が見ごろをむかえたころだった。三十年前とまったく同じ季節と時間に学徒出陣式があったことに気づいた祖父はなつかしさのあまり、僕を真一とかんちがいしてしまった。

2　青山の絵画館を目指して歩いていると、一面に銀杏の朽葉が散り敷いていた。広場と銀杏の連想から、三十年前に一人息子を戦場に送り出すことになってしまったつらい記憶がよみがえり、当時の思いの中に入りこんでしまった。

3　青山の絵画館を目指して歩いていると、同じ大学生であった孫とほぼ同年代で出征していった真一のことがふと頭にうかんだ。三十年前に同じ場所で行われた学徒出陣式での悲しい記憶から、孫と真一が二重写しになってしまった。

4　青山の絵画館を目指して歩いていたところ、銀杏の落葉にまじって銀杏の実がたくさん落ちていた。三十年前に学徒として出陣して亡くなった真一がその実を好んでいたことから、過去と現在の区別がつかなくなってしまった。

問7　――線④「どうしてこんなことになっちまったんだろう」とありますが、「こんなこと」とはどのようなことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　写真家として期待していたのに拒否されてしまったこと。

2　写真館をつぐにもかかわらず大学に進学してしまったこと。

3　大学に進学したにもかかわらず兵隊にとられてしまったこと。

4　大学を卒業して活躍するはずだったのに戦死してしまったこと。

問8　――線⑤「うめえことを言いやがる」とありますが、ここでの祖父の様子を説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　孫のことばが見えすいたお世辞だとわかり、逆にからかおうとしている。

2　孫のことばは真実ではないと思いつつも、調子をあわせようとしている。

3　孫のことばからやさしさを感じたが、すなおに喜びを伝えきれずにいる。

4　孫のことばには大げさなところがあったので、やや納得しきれずにいる。

問9　――線⑥「溢れ出る感情」の内容として**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　義父が老いた今でも、確かな名人の地位を保ち、越えるべき存在でありつづけていることへのうらやみ。

2　義父が娘婿であり弟子である自分よりも、亡くなった真一に愛情を持ち続けていることへのねたみ。

3　偉大な師匠である義父を眼の前にして、カメラのレンズをとおしてしか立ち向かえないもどかしさ。

4　義父から無能と思われていることを気に病みつつ、なげやりな自分を乗りこえようとする意気込み。

問10　学徒出陣の日に祖父は真一の写真を撮影することができませんでしたが、祖父と「僕」はそれぞれ何が撮影をさまたげたと考えていますか。それを説明した次の文の空らん［X］、［Y］にあてはまることばを文中からさがし、それぞれ四字でぬき出しなさい。

写真を撮影できなかった理由を、祖父自身は一人息子の真一に対する［X］がはたらいたからだと思っているが、僕は学徒出陣が決して美徳ではないと見ぬいた名人の［Y］によるものだと考えている。

（問題は次のページに続きます）

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

小鳥の空　　村野　四郎

歌

あなたの大きな胸のなかで
わたしたちの歌は　はしゃぎます
でも　夜が来たとき
あなたは　わたしを止めはしない
あなたには　わたしを泊める枝の寝台がない
わたしは　それが悲しい
わたしは地上の　牙と爪の夜に眠ります
乳色の
あなたの胸は　あたたかい
でも　わたしが射たれた時
あなたは　わたしを抱きとめはしない
こんな小さい罪の重みさえ
支える力が　あなたにはない
わたしは　それが悲しい
わたしは堕ち　凍る地上で腐ります

（『亡羊記』より）

問1　この詩の形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　口語自由詩　　2　口語定型詩
3　文語自由詩　　4　文語定型詩

問2　この詩を内容と形式によって二つに分けるとすると、後半はどの行からはじまりますか。詩中からその行をぬき出しなさい。

問3　――線「牙と爪の夜」の説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　牙や爪などをもつ肉食の動物におそわれる危険がつきまとう夜。
2　牙や爪のようにとがったトゲをもつ植物にさされて眠れない夜。
3　牙や爪のようにするどくかたい石や岩の上で寝ごこち(ね)が悪い夜。
4　牙や爪で傷ついたように、見捨てられた悲しみで心がいたむ夜。

問4　この詩の「わたし」と「あなた」とはだれのことですか。それぞれ答えなさい。

問5　次の文章はこの詩の内容を説明したものです。――線1～4の中から**あやまりをふくむ**ものを一つ選び、番号で答えなさい。

[1]「あなた」は「わたし」たちを受けとめてくれるように見えるが、[2]結局はたよりにならず、裏切って敵にまわる。そのことも「わたし」はわかっている。「わたし」たちは生きるため、ほんの少しだけ食事をとるが、それを許さない[3]人間がいのちをねらっている。「わたし」たちのいのちは短く、死んでいくのは悲しいことだが、だからといって[4]「わたし」も「あなた」も、それをどうすることもできない。

4　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線部のカタカナを漢字で書きなさい。

1　キシカイセイのチャンスが訪(おとず)れた。
2　あまりにひどいことを言われて、怒(いか)りシントウに発する。
3　ブサホウな物言いで先方を怒(おこ)らせる。
4　このままでは次の試合で負けることがヒッシだ。
5　墓の前に花をソナえる。

問2　熟語の構成にはいくつかタイプがあります。その中からここでは次の五つを取り上げることにします。

1「読書」型
2「河川(かせん)」型
3「骨折」型
4「謝意」型
5「進退」型

この熟語の構成の違(ちが)いをよく考えた上で、次のA～Gの熟語の中から1～5にあてはまるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A　利害　　B　公的　　C　創業　　D　勤務　　E　不燃　　F　官製　　G　密命